

雑詠日記

海蝶息音

卷の三

二〇一七年

谷川
修



この広大な世界がどのようなものかわたしにはとうてい分からない
それでも生きていけばしばしわずかな場所を占めている

その跡にできる空隙を保って化石とするために

漏れ出た言葉で埋めるのがこの雑詠日記

美しくつよい形姿を求めているが

いっこう望みは果たせない

それでも

氣息を整える役には

立っているだろう

もうしばらくは

やってみよう

ああ

除夜の鐘が

聞こえる

静かに

.....



一月二日

身心を初体操で再起動

(目白が驚いて飛び去った)

一月四日

元旦に同年が逝く、戒めて

一月七日

会釈する汽水で漁をする海鵜

一月八日

満ち潮が見えずにしかし感知され岸边に寄せる、身を研ぎ澄ませ

一月九日

はぐれ鵜の首ひとつだけ寒の海

一月十三日

老男女「一日だけの淑女」観て心温か寒の一日

映画はこういうおとぎ話にじつに向いている。三十人の観客はみな老人。

一月十九日

園丁の剪定始め梅二輪

一月二十日

小雪舞い天下大寒荒地守る

(日・米両政府の長、施政演説、大言)

一月二十六日　なまこ獲る船や夕陽に春萌す

一月三十日　「見えすいた嘘宣伝の連続」の時代はまさに今のこの国

清沢湧『暗黒日記』を読んで思う、米国のことを嗤ってはおれない。

二月四日　青鷺が仙化重ねる春立つ日　（晴天波無し、彼高みに立つ）

二月七日　石臼の水飲む猫や、寒戻る　（姫睡蓮のお城に上り、背を曲げて）

二月九日　紅梅に寒風唸る夜の留守居　（翌朝、うつすらと雪）

陳舜臣著『天空の詩人李白』を読み始めた。一、二冊エッセイを読んだことがあり、その穏やかな語り口に好感をもっていたのだが、この書物は自作の漢詩も収録しているのと知って注文した。平仄も知らずに勝手に漢字を並べる者は、四声に習熟し漢字の語感にも優れている人の現代漢詩に学ぶべしと思ったのである。本の帯に記された文字「絶筆」は、この註解エッセイが雑誌連載中に病気のため中断され、二〇一五年の死去をうけて出版されたことをいう。執筆は二〇〇八年、すでに八十歳を超えたころの作品だ。

強い意志でリハビリテーションを実行して脳梗塞から立ち直ったようすをテレビで見て、教訓を得たことを憶えている。

李白の詩で人口に膾炙しているものからえらぶという方針から、この書物が最初に採りあげているのは、「子夜呉歌 其三(秋)」——長安 一片の月、万戸 衣を打つ声、秋風 吹いて尽きず、すべて是れ 玉関の情、いずれの日か 胡虜を平らげて、良人 遠征をやめん——である。たしかにわたしも、この詩によって「きぬた」という言葉を知った。その漢字を『広辞苑』で調べると、「砧きぬた」の項には、言葉の意味のほかに、もう一つ世阿弥作の能とあった。柔らかさとつやを出すために衣(きぬ)を打つ手仕事をしながら、遠くにある良人(おっと)を想うというテーマである。日本でも古くから李白のこの詩の詩想がよく知られていたことを証言している。陳舜臣は、「子夜呉歌」という歌題のいわれなど、うんちくを披露してこの五言の古詩を解釈している。

その文中に、「きぬた」は秋から冬にかけての夜なべ仕事と書いているのに、一片の月は、「満月ではない。さびしげな三日月ていどであらう」としている。これを見て、陳さんにもうかつなことがあると思った。三日月は宵に現われ、夜なべ仕事をするころにはもう見えない。三日月がきぬたと同じ場面にあつては齟齬を来すのである。試みにインターネットでこの句の解釈を探すと、満月とするものが三つも見つかった。NHKの大河ドラマの発想がここにもある。人はしばしば、風景を実際に眺めるよりも観念

的にとらえるのだ。念のために愛用する岩波文庫『李白詩選』を開くと、「満月・半月・三日月を問わない」としている。秋の夜なべ仕事は、通常、夜半に至る前にきりあげるだろう。零時以前には、満月なら中天よりも少し東側に見え、半月なら西に落ちかかり、三日月ならすでに没している。ところで、胡虜は西の異民族を意味し、玉関すなわち玉門関へは、長安から西へ向けて出発しシルクロードをたどるのである。この詩は西方に外征している良人を想う妻の心情を詠うのだから、夜ふけに戸外に見えて良人のいる西を意識させる半月が最もふさわしい。インターネットに、典拠を挙げて、遠く離れて別れ別れに暮らす夫婦が夜空を見上げて想いを仮託できるのは半月だとする註解があった。この心理は、半月が夫のいる方角に見えるときにこそ生じるだろう。

漢語になじんだ陳さんは、一片の月という言葉が満月ではしつくりせず、欠けた月でも繊細な三日月がさびしい心持をよく表わす、と考えたのである。そして、詩人が実況を詩につくるとは限らないことを思えば、その理解は排除できない。李白は、西の空に没しようとする三日月を見て、シルクロードや城塞やらの連想に誘われ、この詩の着想を得たのかもしれない。だが、歴史の知識豊かな陳さんは、この詩の詠む遠征は南詔へだろうかと踏み込むので、それなら南方となつて満月でもおかしくないことになる。岩波文庫の註解はそこまですごうか？ やめておこう、こう理の勝ちすぎる語句の解釈をすると、鑑賞の方が散漫になってしまう。詩を味わうことが肝要だ。

陳さんは、高所から見下ろすのが李白の詩だと言う。まことにこの詩は、万戸の広がる長安の都の上に一片の月の懸かかる天と地を提示する。しかもその大いなる空間にきぬたの音を響かせて、留守宅の妻が遠く征旅にある良人を気づかう情景として描き、李白にしては濃やかな心情に満ちている。多くの読者をしみじみと感させることが納得できる。陳さんは、春夏秋冬を詠む「子夜呉歌」のうちこの秋の詩だけが『唐詩選』に採用されたのだと指摘して、中国でこの詩が好まれたことを教える。わたしは、ふと蕪村の俳句や俳画の情景に似ていると感じ、この好みは日本でも同じだと思った。

続けて、「子夜呉歌 其の四(冬)」が註解される。この詩も、留守宅にあって(たぶん)妻が夫を気づかう情景を詠う。やはりシルクロードのあなたに在る人を想う。伝送の駅使に間にあうように一晩で(軍装を温かにする)綿入れを作るけれど、届くのに幾日かかることやら、と。描写は具体的で、針を通してはさみをもつ冷たい手を読みこんで、裁縫のようすを細やかに示す。其の三(秋)と其の四(冬)は連関して、秋の詩がほのかな月光の下の広大な眺望を描くのに対し、視線を万戸の家々の方に降りしていくと、冬の詩がその一つの家で灯りをたよりに手仕事をする女性を描く。二つの詩は、眼を閉じれば脳裏で、光と影で深い情緒をかもしだす一對の情景画と肖像画に化する。

さて、「子夜呉歌」は子夜という女性がつくった呉の曲に由来するらしい。女性を主役とする古い歌の変奏曲を編むのに、李白は、其の三と其の四で同時代の長安の実生活

へと視線を移して転調させる前に、其の二(春)と其の二(夏)では古歌の場景をそのまま借用して明るい調子で始める。其の一では桑の葉を採る美しい女性が権勢ある長官を拒絶する場面、其の二ではだれもが知る美女西施が蓮を採る場面。二つは華やかな一対の屏風絵をなす。春の詩は、陳さん指摘のとおり、緑水・青條・白日と色彩を表わす語を連ね「鮮」という文字まで添える。冬の詩では冷たさで温かい心を表わす「素手」が、ここでは「紅粧」とあいまって色彩に加えなまめかしさまで表現する。春の桑畑に立つ彩色美人図である。夏の詩は、もう暑くなる陰曆五月の湖を李白一流のやり方で三百里の鏡湖と表現しておいて、前景の舟の中に蓮の蕾が開くのを見る美女を描く。こちらはまばゆい風景画。その姿を見ようと人の集まるのを詠うのだが、人口に膾炙しすぎたさすがの李白もそれ以上ほめたたえるのに困っているようす。西施は、月の出を待たずに舟をめぐらせて越王の家に帰ってしまう。でもわたしは、中秋の名月の日に越の故地紹興を訪れて、東湖に遊び、越王殿に逍遙し、満月の下、池の向こうの舞台で演じられた(南宋の)知的な女性唐琬の物語を観たことを想い出して、この詩に不平は言わない。

一片の歌句を得ただけなのに、李白を註解した書物を読んだことに触発されて、本来雑詠を記すべきこの日記に長々と贅言を連ねてしまった。今はもう、ちらほらと梅の花が咲きだしている。もうすぐ、夜には、猫の声を聞く季節になるだろう。

二月十五日

モグラ逐うペットボトルの風車焚火の風にいぶられ回る

火突き棒杖に園丁火を守る

無残やな王の異母兄殺される

(王家の男子に生まれるのは今も危険)

世の動きは止むことがない。東芝は、先年ババを引かされて米国の原子力企業を買収したが、そこが赤字を生産するのを隠し切れなくなつて、ついに債務超過に陥つたことを発表した。主要な稼ぎ部門の半導体事業を手放すという。東京株式市場の第一部から第二部に格下げになりそうだ。二〇一一年に津波以上に原子力発電所のメルトダウンが日本の実態をあらわにしたのだけれど、世界の趨勢に鈍感なこの国の原子力事業に対する前のめりの姿勢が、これらの災厄をもたらしたのだ。この災厄は重大な危機のうちの一つに過ぎない。報じられるいくつもの製造大企業の不振が問題の広がりを与える。産業だけでなく政治をはじめこの国の制度の大半が、疲労骨折の症状を示している。杖にすがって立つ園丁の足元は、腰の痛みのせいばかりでなく、揺らいでいる。

二月十七日

峻厳な大地を尋ね行く「LIFE」、生とは何か問いかける者 (映画)

二月二十一日 『天空の詩人 李白』を読み終わる窓には都市の空と白雲 (高樓喫茶室)

まどろんだ眼の下の海峡は船が行き交ううらかな春

漁り舟長門二見の春風の陽に照る海の光に溶ける

二月二十八日 鉄道の下抜け藪の椿折る

三月一日 極小の波立てシラス進む海

三月二日 春雷に目覚めて今日を思案する

三月四日 桜の花活けてにぎわうカント像 (写真の像の下、蝸牛の花器に桜桃)

三月十二日 血族が木魚斉奏する春日 (創立三百年の念仏場、末裔の年忌法要)

三月十七日 陽に光る辛夷の下を進む棺

三月二十一日 書に誘う静雨にあせび白さ増す

『荀子』勸学篇、吾かつて終日思うも、須臾の学ぶ所にしかざるなり。

三月二十三日 流血のテロル見つめるビッグ・ベン時を刻んで良識を俟つ

ロンドンでテロ、死者四人負傷者数十人。英国首相は、死傷者を悼み、最も古いその国会に言及してデモクラシーの価値の擁護を訴え、開会中の議会は明日も審議を続け、国民は諸活動を続けようと呼びかけた。格調高い声明が、歴史の転変を学習した英国人の強靱さはしなくも示す。緊急の際に、日本に住むわたしはこれほど見識ある文章を書けるか。言葉を鍛えることの大切さを知る。

三月二十九日 鶯の声でかすんだ海見る湯

四月二日 桃を打つ霰は時代錯誤する

四月八日 霧籠める桜樹林で茶を喫す

四月十二日 選拳カー尻目に蝶と声交わす

(荒れ畑に除草剤撒布)

四月十三日 拙なればまた鶯と歌う日々

四月十四日 海棠に銀波照り映え祝う朝この幸いの時永らえよ

四月十五日 鶉が一羽家路をめざす春の空やわらかに暮れ虹消え果てる

四月十六日 沖ノ島見晴らす奇しき山の寺茶をふるまわれ由緒拝聴

昔から御岳参りをもてなした里の茶店でそばとこんにゃく

四月二十一日 旗立てて太鼓を打って列なして漁船が巡る海に幸あれ

四月二十五日 大和バラ今日は陽光仰ぎ見て純白磨き白日を祝ぐ

生り物を支えてもらおう女竹採る老夫を囃しホトトギス鳴く

四月二十七日

家計のため腎臓売った十七歳その肉声が西から届く

騒乱の西アジア、難民の苦境。これはわたしの同時代に起きていること。
極東では戦争の危機を演習中、この国も同盟国のあらゆる方策を承認し。

五月六日

頬張って頬笑む口にサクランボ

五月十七日

春熟れて満ち足りて在る山と海

キャベツ入れ孫に贈った玉手箱変化へんげを為して紋黄蝶生む

贈り主は自身が白頭への変化を経験した者。

五月二十五日

実生から育てた唐の枇杷を食みこの十年を顧み思う

(大きな果実)

六月二日

実を生さず三年経って鈴なりの小粒の枇杷が老夫ねぎらう

六月四日

水やりは散歩と同じエクササイズ五体動かし人整序する

六月十日

虹立てて息つくバラを慈しむ

米・英・仏…西アジア…東アジア・日本で起きているのは歴史の変奏曲？。

六月十二日

お天道と持久を競う老田夫

六月十五日

闇深い夜中に目覚め手を顔に思念は巡る人の生問い

三味の音にクチナシ白く乾く暮れ

(近所の九十を超えた人の三味線)

市の水道課が節水を呼びかけて回った。間を置いて雨の降った四日で、水槽にためた雨水を見積もって、たぶん、雨量は六十日間で三十㎜を超えないだろう。蚊も見ず栗の花が散る。大旱。

六月十八日

人生七十年

初見栗枝枯

不可問天道

生命正水壺

七月一日

床下を匍匐前進する珍事、人間じつに事件に満ちる

七月六日

大雨の被害伝える夜の闇に月下美人の香りは沈む

七月八日

サツキ咲く閏五月の赤とんぼ汗もかかずに老夫の上を

七月十三日

大木の染井吉野で蟬の鬨

七月十四日

鬼百合のまだつぼみの花に涼やかに止まっている蜻蛉は
わたしが今どんな生き方をしているか見届けに来たのか

七月二十日

お茶づけをかきこみ大地に捧げもの

七月二十三日

東北で豪雨、大暑に林檎咲く

(小さな町の海に花火も咲いた、三千)

七月三十日

時は夏、百日紅の五十日

八月三日

学校で母語習うこと禁止する文明国に未来はあるか

清国に新疆(しんきょう)、新領土を加えた乾隆帝は漢語とその文化を尊び愛好した。

だが、満州語もウイグル語も抹消しようとする現代の政策に同意するだろうか。その命令は憲法にも少数民族に対する法律にも違反するという。共產主義の人民共和国がいまだに中華帝国時代の新疆というイデオロギー臭のする言葉を使う。ウイグル語を話す人々は一千万人もいるというのに。敬愛する人を生んだ文明国はどうなるのだろうか。

八月四日

園丁は日課に汗し夏籠り

(浦の庵で留守居)

汗ぬぐい無花果食えば海の風

青鷺が二人、見下ろす夏の海

(海に突き出たベルト・コンベイヤーの上)

八月六日

成人になって産声あげる蟬

緑陰へ黒衣の蝶がよぎる路

無縁墓地清掃をする地下じげの衆

空蟬に水満たそうとする庭師

人の命は器水と習う

八月十三日

スカイプで果報を誇る、ブドウ・ナシ

(海外を旅行中の孫へ)

八月十八日

突然の日本アラート平穩を失う時を予行演習

着弾地不明のミサイルが十分足らずで飛んで来るのを広域に知らせて何を期待しているのだろうか。攻撃ではないと判断しているのなら、避難してくださいという呼びかけはおかしい。小学生に恐怖心を植えつけるのではなく、国民の判断に必要な重要点を知らせるべきだ。政府は戦争回避のあらゆる方策をテーブルに載せて比較検討しているだろうか。

八月二十三日

命渡し赤手蟹臥す処暑暑し

八月三十一日

八月尽瀧に消え入る蟬の声

(宇佐市東椎屋の瀧)

九月一日

風を入れ蜘蛛と書に就く時を得る

窓外聞鴉声

老生知秋来

勉強尚須愛

紅花百日開

九月十四日

退治する葛にも誇る花がある

九月二十八日

一国が思慮を失い浮動して今日退廢の極みへ向かう

この衆愚政治を打破するのにただ破局を待つことしかできないのか。

九月二十九日

竿竹を売る声響く選挙前

国溶けて田にはススキが乱れ咲く

十月五日

三柱の石像の見る天草を並んで望む原城の上

十月二十二日

衰退の階段降りるまた一つ自他の歴史を学ばぬ民は

十一月十六日

情感を抑えて日々を過ごすうち木々に教わる秋の深まり

旅に出て、没頭することがあって、体調を少しこわすなどするうちに

たまねぎを植える胃弱の作男

十一月二十八日

高祖山仰ぐ山茶花咲く社

(山には山幸彦がいて社には木花の咲くや姫)

十二月一日

とりわけて彼岸は小春、肩ほぐす陽を背に受けて海を見て立つ

十二月五日

陽に乗って細雪舞う共に舞え

十二月九日

鳶が二羽冬の曇天追い払う

十二月十一日

内海を圧して渡る冬の風

千鳥は磯に肩を寄せ合う

十二月十七日

初雪を祝いメザシの朝餉食う

十二月二十一日 霜降りた街道急ぐ武者一騎

十二月二十三日 行く川の流れの末の年の瀬で暮らしを立てて小鴨は生きる

十二月二十九日 夕闇に消える海見る露天風呂首までつかり身心癒す

十二月三十日 山野草求め野を行く小晦日

十二月三十一日 モンテーニュ読んで三省、除夜の想

二〇一八年 正月
白江庵 謹製



今年はここに引用できる『詩』を読まなかった。代わりに、

M・ブロック『歴史のための弁明』から印象深い文を

歴史の対象は人間たちの諸活動の光景。

未来への賭けをせずにそれらを識別するこ
とはまずできない。

当事者であった人間とその環境をなす文明

との運命の曲線：

人々の運命の内奥の原動力、心性や感受性、
技術、社会ないし経済の構造などの変化。

人はある価値体系に対して立場を決めず
に有罪ないし無罪を言い渡すことはできず、
その体系はいかなる実証科学にも属さない。
歴史とは人間の多様さの広い経験。

ペギーという人の言葉「立派な農民は、
収穫と同じく耕作と種まきを愛します」

